
にゃんとも寒い日の出来事

ランデブー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

にゃんとも寒い日の出来事

【コード】

N5392D

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

ニャン次郎とニャン太と人間の、にゃんとも寒い日の出来事。

空にあんにゃに真っ赤にや太陽が浮かんでいるのに、何故全然暖かくにゃいんだろう？ 何故こんにゃに寒いんだろう？ 今日にはゃんとも寒いにゃ、ブルブルです。

オイラは寒いのが苦手、だからにやるべくこの土管から出にゃいようにしている。でもお腹は空くにゃ、お腹がぐーぐー鳴ってウルサイにゃ、誰か親切にゃ猫がお昼ご飯を持ってきてくれにゃいかにゃー。

にゃ、友達のニヤン太がお魚さんを持ってきてくれたにゃ。

「ニヤン次郎、お昼ご飯だ。カレイだ」

「ありがとにゃ、ニヤン太は優しいにゃ」

寒空の下、土管のにゃかでオイラはお魚さんに噛り付いた。ニヤン太はお魚さんに噛り付かずぼーっとしている、どうしたんだろう元気にゃいにゃ。

「ニヤン太、悩み事でもあるにゃ？」

「えっ、何でわかった？」

「だってお魚さん食べてにゃいしぼーっとしてるにゃ、そりゃわかるにゃ」

「そうか、俺ぼーっとしてたか……」

ニヤン太元気にゃいにゃ、オイラはお友達だし相談に乗るにゃ。その前にこの美味しいカレイさんを食べるにゃ、残すと勿体にゃいし骨まで食べるにゃ！

「そのカレイあげるよ、俺はいらないから」

そう言っつてニヤン太は土管から出て、寒い外へと行っつてしまつた。オイラはあと半分残つているカレイと一匹のカレイをヨダレを垂らしにゃがら見た、しかし顔を左右に振つたあと風がビュンビュン吹いている外へと出た。ニヤン太は友達だもん、放つておけにゃいよ。

「待つて！ ニヤン太待つて！ オイラに話してよ、にゃにがあつたのか」

「ニヤン次郎……」

チリンと首に付いている鈴を鳴らし、ニヤン太がオイラの方に歩いてくる。にゃにゃ、話してくれるんだ！ そうにゃんだ！

ニヤン太はオイラの目の前に来て、目を細めてじーつと見てきた。にゃ、にゃにか顔に付いてるにゃ？ 朝はちゃんと水で顔を洗つたにゃ、冷たかつたけど我慢したにゃ。

「ニヤン次郎、お前」

「友達だから放つておけにゃいにゃ！ 友のピンチは友がお助けしにゃいと！」

「……ああ、ありがとう。そのまま動かないでね」

にゃんか予想外にゃ！ オイラが想像していたのは、ニヤン太がとびつきりの笑顔ににやる事にゃ。心配してくれてありがとう、お前は良い友だ。つてなるかにゃと思つたのに、実際はリアクション低いにゃ。しかも動かないでつて、超氣ににやるにゃ。

「迷惑にゃ？ 友のお助けはいらにゃいにゃ？」

「いるよ、全然迷惑じゃないよ」

「だつたらにゃんでリアクション低いにゃ？」

「頭に乗つてるよ、僕達の大好物が」

空き缶がコロコロ転がってオイラに当たった。にゃ？ 大好物が乗ってる？

頭を振ってみた、そしたらネズミが地面に落ちた。何故今まで気付かになかったんだろう？ オイラ、猫の好物であるネズミに！ 寒くて気付かなかったのか、ニヤン太を心配していて気付かなかったのか、この二つだとしたら後者が良いにゃ。

チューチュー鳴いてちっさくてすばしっこくて美味しいネズミ、ひよっとしてこのネズミも寒いの手で土管にいたのかな。

そうか、ニヤン太はこのネズミを狙っていたのか！ だから動かないでって言ったのか！

「魚も美味しいけどネズミも美味しいよにゃ」

「そうだね、でも俺はいらぬよ」

その時ネズミは逃げるため走りまわりましたが、しかしオイラの猫パンチをくらい気絶しました。ニヤン太は手が震えていました、寒いのかにゃ。

「それを持って土管に戻ろうか、お腹すいたし」

「にゃん！」

素直じゃにゃいにゃ、お腹が空いてたにゃら言ってくれれば良いのに。

オイラとニヤン太は、風を多少は凌げる土管に入った。残したカレイはそのままだった。

「食べようか、食べ終わったら話を聞いてくれ」

「わかったにゃ！」

オイラ達はお昼ご飯を食べた、黙々と食べた。
カレイさんありがとう、貴方のおかげでオイラは生きています。
生きとし生けるもの、今日も精一杯生きましょう。

「お腹いっぱいになつたし、にゃにがあつたのか教えてほしいに
ゃ」

「うん、教えるよ」

その時ぽたぽた、という音が聞こえてきた。雨が降ってきたんだ、
雨は冷たいから嫌だにゃー。

「ケント君とアヤノちゃんがケンカしててさ、胸が痛くてあの家にはもう帰りたくないんだ」

「……」

「それに俺は飼い猫じゃん、お前と違って良い思いしてるしそれが情けなくて。野良のお前は格好良い、たくましい、一人で何でもできる」

「ニヤン太、何言ってるにゃ」

「俺は人間に飼われてるから雨風の心配をしなくても、食事の心配をしなくても良い。でもお前は毎日精一杯に生きている、俺は精一杯に生きていない。飼い猫なんて負け猫だ」

ケンカで居場所がやくにやつて色々考えてしまったんだ、そして自由気ままに生きている野良猫に嫉妬しつとしてるんだ。まずは落ち着かせにゃいと、深呼吸でもさせにゃいと。

「落ち着こうよ」

「落ち着いてるよ、俺は平常心だ！」

「今頃ニヤン太をさがしてると思うから家に帰ろう」

「さがしてなんかない、俺はいらないんだ！俺のせいでケンカに

なっ たんだ！」

ニヤン太は走っていった、雨が降りしきる中を。オイラは走っていった方を見て涙を流した。

「ニヤン太の馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿！」

オイラは涙を流しにやがら走った、雨は嫌だけど今はそんなにやの関係にやい。友をお助けるんだ、大好きにやニヤン太をお助けるんだ。

「ニヤン太！ ニヤン太何処！ 返事してよ！」

叫んだ、人間が何かしらとオイラを見ても、人込みの中でも、雨に打たれにやがら、お助けするために叫んだ。

走った、叫ぶのと同じくらい。もう足が棒のようにやっっていて、これ以上は走れにやい。ゴメンねニヤン太お助けできにやいや、こんなオイラは友達失格だよね。

「ニヤン次郎？ 君ニヤン次郎だよね？」

その時声が聞こえた。そこにいたのは、傘をさして泣き目にやっっているアヤノちゃんだ。

「ごめんね、私達がケンカしたから君にまで迷惑をかけて」

ひよいと持ち上げられ傘の中で抱き締められた。にや、にやかれでも困るにや！ 抱き締められたら照れるにや！

「ニヤン太がケンカなんかやめてって言うてくれたの、ケンカなん

かしても意味ないって言ってくれたの」

「そして、俺には大好きなお友達がいる、ニヤン次郎という最高のダチがいるって教えてくれたんだ」

ケント君だ、アヤノちゃんと同じように涙目だ。にゃかにゃいで！ オイラにゃみだには弱いんだ、もらい泣きってヤツしちゃうんだ。

「心で伝えたんだ、ケントとアヤノに」

ニヤン太はケント君に抱き締められながら言った、その表情は笑顔だ。

仲直りしたんだ、良かったねニヤン太。オイラの事を最高のダチって言ってくれたんだ、ありがとう。

「いつでもお家に遊びに来て良いからね」

アヤノちゃんが笑顔で言った。

「一緒に遊ぼうぜ」

ケント君が言った。

「さっきはネズミを捕獲できなかったから、今度ネズミの捕獲の仕方を一から教えてくれよな」

ニヤン太が言った。

「みんなありがとう、オイラは幸せにゃ」

にゃんとも寒い日の出来事

ニヤン次郎が言った。

今日はにゃんとも寒い日だったけど、とっってもあっかい事があったから風邪の心配はしにゃくても良いにゃ。

(後書き)

〇〇にゃ、と猫語(?)で読みにくかったらすみませんでしたm)
——) m

にゃんとも寒い日の出来事

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5392d/>

にゃんとも寒い日の出来事

2008年11月7日08時16分発行